

実践報告

超短期派遣留学における留学前の英語準備対策と 英語運用能力の向上との相関について

西川 美香子

要 旨

京都大学では平成 23 年度後期より超短期留学プログラムと連動した新たな外国語科目（全学共通科目 C 群外国語（英語）科目）を開講した。本科目の役割は超短期留学プログラムの準備であり、専門分野でのコミュニケーションスキル（アカデミック・ライティング、プレゼンテーション、ディスカッション）の向上を目指している。その中で、英語運用能力試験を受験することを超短期留学プログラムへの参加条件としており、その試験結果により本科目による英語運用能力の向上を定量的に検証する。本稿では、超短期留学プログラムへの参加者が受験した英語運用能力試験の結果を統計分析することにより、参加者の英語運用能力の特徴を明らかにすると共に、超短期派遣留学に必要な英語運用能力を養成するための準備講座の改善点について述べる。

【キーワード】超短期留学プログラム、準備講座、英語運用能力

1. 超短期派遣留学に必要な英語運用能力を養成する取り組みについて

本学は国際化拠点整備事業（グローバル 30）採択校として、従来の交換留学促進策に加え、新たな試みとして、超短期派遣留学プログラム（3 カ月間くらいまでの期間の留学を指す）を推奨してきた。平成 22 年度には総長裁量経費採択事業⁽¹⁾により、オーストラリアにある本学の協定校に文系・理系の 2 種類の超短期派遣留学プログラムを実施した。この超短期留学プログラムは理系及び文系の学部生向けに開発され、英語運用能力を高めるためにコースデザインされていること、準備英語講座と連動させている点が特徴的である。海外留学の準備として重要な位置を占めているものの一つとして、英語運用能力試験の受験が挙げられる。これは、留学志望先が規定する英語運用能力を証明するためのものである。ところが、平成 21 年度に実施した調査⁽²⁾によると、留学を希望する新入生の大半が英語運用能力試験を受験したことがないとの回答を得た。この結果をふまえて、本学では超短期派遣留学前に学内実施される International English Language Testing System（以下 IELTS® の登録商標を入れるのが正式名であるが、省略し IELTS とする）の受験を推奨している。更に、平成 23 年度より「オーストラリア春季英語研修プログラム」の参加者向けに準備英語講座（全学共通科目 C 群）を開講するに至った。このオーストラリアへの英語研修プ

プログラムの最大の特徴は、英語運用能力を高めるためにコースデザインされていることである。本プログラムでは、学内で実施される IELTS の受験を参加者に義務づけ、留学プログラムにおいて必要とされる英語4技能（リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング）の能力を評価できるようにした。更に、超短期留学プログラム開始日と最終日に、面談形式による学生のスピーキング技能の評価（IELTS のスピーキング・スコアに換算できるもの）を行い、参加者の英語運用能力の変化を定量的に測れるように工夫した。本稿では、これらのアセスメントでの結果を基に、留学前の英語準備対策が学生の英語運用能力の向上にどのように影響するかについて検証するとともに、超短期派遣留学に必要な英語運用能力を養成するための準備講座の改善点について述べる。

2. 英語運用能力の向上を目的とする新たな英語科目の実施

2.1 超短期派遣プログラムと通常型講義の連動

オーストラリア春季英語研修プログラムは、京都大学の学部生の学問的な興味に合わせ、派遣先大学と本学の教員が共同で教育設計したアカデミックスキルとしての英語を学ぶためのプログラムである。本学の学生交流協定校であるシドニー大学とニューサウスウェールズ大学において2種類のプログラムを平成23年2月～3月に実施した。筆者はARCSモデル（動機付けに基づく学習意欲の向上を図るモデル。参考文献(2)を参照）に基づくコースデザインに着目し、その有用性を実証するための場として超短期派遣留学に準備講座を設置することを着想した。このプログラムの実施を契機として準備講座の設置構想の具体化を進めた。その結果、平成23年度後期より超短期留学プログラムと連動した新たな外国語科目（全学共通科目C群外国語（英語）科目（各1単位））を開講した。それが「異文化コミュニケーション」（以下、異文化とする）及び「サイエンスコミュニケーター」（以下、サイエンスとする）である。この科目は超短期派遣留学（平成24年2月～3月に実施）が組み込まれている⁽³⁾。表1に、超短期派遣プログラムの内容を記す。

「異文化」及び「サイエンス」は超短期派遣留学プログラムの準備講座として位置づけてカリキュラムデザインされた。本科目では、学生の英語コミュニケーション能力、とりわけ専門分野でのコミュニケーションスキルの向上を目指し、アカデミック・ライティング（ショートエッセイ作成）、グループ・プレゼンテーション、ディスカッションの基礎を準備講座（全15回）において学習することで、超短期派遣プログラムで必要となる実践的な英語運用能力が習得できるようにした。この準備講座の部分（90分授業×15回）では、学生が留学先のプログラムにスムーズに入っていけるように講義の各回にトピックスが設定され（表2シラバス参照）、それに沿って教員、ティーチングアシスタント及び学生が英語のみを使って参加する方式の講義が進められた。なお、これらの超短期派遣プログラムに参加するには、この科目に履修登録し、準備講座への出席が義務付けられた。

表1 オーストラリア超短期派遣プログラムの内容

プログラム名	Inside Australia: Cross-cultural Communication in English	The Effective Science Communicator in a Global Society, Enrichment Program in Australia
派遣先	The University of Sydney	The University of New South Wales, Institute of Languages
実施期間	2012年2月25日～3月18日 (約3週間)	2012年3月3日～3月18日 (約2週間)
主な内容	文系学生を対象にコミュニケーション能力の向上を目的とする。多民族国家であるオーストラリアの歴史、異文化を体験しながら学生の英語による異文化コミュニケーションスキルを養う。 語学研修のほか、リーダーシップ科目などのワークショップや異文化に関するレクチャー、正規授業の聴講、現地学生とのディスカッショングループ、課外活動などのグループリサーチを含む。成績は、授業での積極的な参加、ショートエッセイ、グループ・プレゼンテーションの結果判定による。	理系学生を対象にコミュニケーション能力の向上を目的とする。日常生活に関わりのある科学技術と社会の関係についてディスカッションを行い、学生の英語による発信力を養う。 語学研修のほか、関連トピックに関するレクチャー、正規授業の聴講、課外活動などのグループリサーチを含む。成績は、授業での積極的な参加、ショートエッセイ、グループ・プレゼンテーションの結果判定による。
プログラム	ホームステイ滞在型	ホームステイ滞在型
参加費用	425,000円(旅行代金・食費込み)	320,000円(旅行代金・食費込み)

表2 超短期派遣留学プログラムに連動した準備講座のシラバス

< 異文化コミュニケーション/Cross-cultural Communication in English >

	日程	曜日	内容
第1回	10/3	月	Class Orientation
第2回	10/17	月	Identity
第3回	10/24	月	Values
第4回	10/31	月	Culture Shock
第5回	11/7	月	Culture in Language
第6回	11/14	月	Body Language and Culture
第7回	11/21	月	Individualism
第8回	11/28	月	Gender and Culture
第9回	12/5	月	Diversity
第10回	12/12	月	Social Change
第11回	12/19	月	Global Community
第12回	12/26	月	Academic Writing: Short-essay topics will be assigned
第13回	1/16	月	Effective Presentation: Groups will be assigned
第14回	1/23	月	In-class group presentation
第15回	1/30	月	In-class group presentation

<サイエンスコミュニケーター/English Communication in Scientific Inquiry>

	日程	曜日	内容
第1回	10/6	木	Class Orientation
第2回	10/13	木	Scientific Inquiry and Inquiry Process
第3回	10/20	木	Characteristics of Living Animals: Animal Adaptations for Survival
第4回	10/27	木	Ecosystem and Changing Environment: Loss of Tropical Rain Forests
第5回	11/10	木	Earth Energy Resources: Renewable Energies and Green Technologies
第6回	11/17	木	Global Weather: Damage to Earth's Ozone Layer
第7回	11/24	木	Health: Stress and Health
第8回	12/1	木	Human Body: Fighting Infectious Diseases
第9回	12/8	木	Heredity: Pros and Cons about the Genetically Modified Food
第10回	12/15	木	Space Exploration: Space Junk and Satellite Pollution
第11回	12/22	木	Transportation Technology: Intelligent Transportation Systems
第12回	12/27	火	Academic Writing: Short-essay topics will be assigned
第13回	1/5	木	Effective-Presentation: Groups will be assigned
第14回	1/12	木	In-class Group Presentation
第15回	1/19	木	In-class Group Presentation

2.2 英語運用能力の評価

本科目のもう一つの特徴は、履修者の英語運用能力の変化を定量的に見られるようにデザインされている点にある。まず、短期プログラムを履修するために必要な英語運用能力は主に外国の大学進学準備コースの必要条件と同様レベルの語学力に設定した。そこで、参加者の語学レベルをIELTSのバンドスコアで5.5程度を目安とし、本科目の履修者（即ち、超短期留学の参加者）にはIELTSの受験を義務付けた。IELTSでは、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの4つの技能について評価される。本試験は講義に付随することを考慮し、IELTS実施団体の日本英語検定協会の協力を得て学内において実施した（平成23年12月3日）。IELTSとは別に、留学期間中には二回のスピーキング・アセスメントを実施した。これらの試験のスコアをもとに本科目履修者の英語運用能力の変化を定量化した。本稿では、平成23年度実施のC群外国語（英語）の「異文化」及び「サイエンス」の履修者（全59名）を調査対象とし、英語運用能力をIELTSと留学期間中のスピーキング・アセスメントで評価した結果について報告する。

3. 超短期留学プログラム参加者の英語運用能力

3.1 調査対象

平成23年度オーストラリア海外研修プログラムの参加者は全59名であった。プログラム履修者の内訳を表3に示した。異文化プログラムには文系学部を中心に29名が、サイエンスプログラ

ムには理系学部を中心に30名が参加した（表3（a）、（d））。「異文化」及び「サイエンス」の両プログラム共に、参加者の学年に関する偏り、男女比に関する偏りは無かった。（表3（b）、（c）、（e）、（f））。この内、50名が留学前に実施したIELTS（平成23年12月3日に学内で実施）を受験した。

表3 2012 オーストラリア海外研修プログラムの履修者

異文化系プログラム（The University of Sydney）

(a) 所属の内訳

所属学部	参加者数
文学部	9名
教育学部	1名
法学部	11名
経済学部	4名
理学部	1名
工学部	2名
総合人間学部	1名
小計	29名

(b) 学年の内訳

学年	人数
1回生	14名
2回生	12名
3回生	1名
4回生	2名
合計	29名

(c) 性別

性別	人数
男	13名
女	16名
合計	29名

理系プログラム（University of New South Wales, Institute of Languages）

(a) 所属の内訳

所属学部	履修者数
理学部	5名
医学部	3名
薬学部	3名
工学部	10名
農学部	8名
総合人間学部	1名
小計	30名
参加者数	30名

(b) 学年の内訳

学年	人数
1回生	15名
2回生	9名
3回生	2名
4回生	3名
5回生	1名
合計	30名

(c) 性別

性別	人数
男	17名
女	13名
合計	30名

3.2 IELTS スコアの分析による英語運用能力の評価

IELTS はリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングの4つのセクションから構成され、それぞれのセクションは1.0～9.0まで0.5刻みのバンドスコアで評価される。総合スコアも同様に1.0～9.0のスケールで評価される⁽⁴⁾。まず、本プログラム参加者の受験結果をデータに用い、プログラム参加者の英語4技能（リーディング（R：Reading）、リスニング（L：Listening）、ライティング（W：Writing）、スピーキング（S：Speaking））のスコア間の相関の有無を統計解析（相関散布分布及び主成分分析）により評価した。次いで、留学前のIELTSスコア（スピーキング・セクション）と留学中に実施されたスピーキング・アセスメントの結果を比較し、スピーキング能力の変化について検証した。

3.3 プログラム参加者の英語 4 技能に関する分析結果

超短期留学プログラム参加者の IELTS 受験の結果を図 1（スコア分布）及び表 4 に示す。全受験者の平均スコアは 5.53（標準偏差は 0.57）であった。留学に望ましいとされるスコア 5.5 以上を満たした参加者は 33 名（平均スコアは 5.85、標準偏差は 0.36）であった。

英語 4 技能の各平均スコアは、リスニング・スコアが 5.44（標準偏差は 0.69）、リーディング・スコアが 6.49（標準偏差は 0.68）、スピーキング・スコアが 4.97（標準偏差は 0.84）、ライティング・スコアが 4.96（標準偏差は 0.65）であった。受容技能（リスニング・スコアとリーディング・スコア）のスコアと産出技能（スピーキング・スコアとライティング・スコア）のスコアに有意差（ $p < 0.05$ ）が認められたことから、英語 4 技能のスコア間に何らかの相関があることが予想される。各技能間の相関を相関係数で評価した結果を表 5 に示す。受容技能同士の間及び産出技能同士の間について有意な相関が見られた。このような各技能間の相関は別の英語運用能力テスト（TOEIC）のスコア分析の結果でも得られており、英語 4 技能が互いに相補的な関係である（つまり、一つあるいは二つの英語技能の試験結果を用いてすべての英語運用能力を評価できない）と示されている（参考文献（2）を参照）。以下に、超短期留学プログラム参加者の IELTS スコアの特徴を述べる。

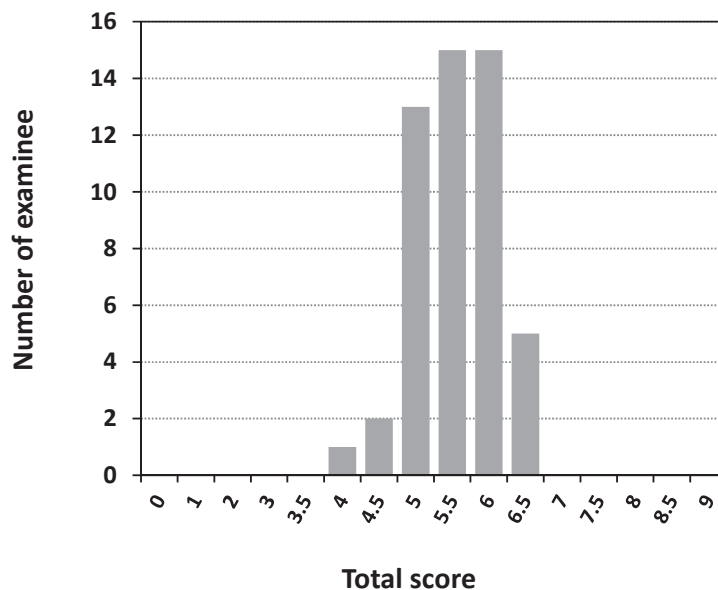


図 1 超短期留学プログラム参加者の IELTS のスコア分布

表 4 IELTS スコアの平均値

	人数	平均点	標準偏差
男性	26	5.48	0.72
女性	24	5.33	0.49
全体	50	5.53	0.57

3.3.1 リーディング技能とその他の技能の相関

リーディング・スコアに対するリスニング・スコアの相関は、他の技能（ライティング・スピーキング）のスコアに対する相関に比べより高い（ $R^2>0.6$ ）。日本の中等教育における英語試験（例えば、大学入試）では、リーディング技能及びリスニング技能、即ち英語の受容技能が主に問われる。このため、リーディング技能とリスニング技能の間に高い相関がみられたと推測される。

3.3.2 ライティング技能とその他の技能の相関

ライティング・スコアに対する他の3技能（リーディング、リスニング、スピーキング）のスコアとの相関はどの技能に関しても高い（ $R^2>0.6$ ）ことがわかった。これは、ライティング・スコアが高いと、他の技能についても高いスコアを獲得する傾向があるということを示唆する。

3.3.3 スピーキング技能とその他の技能の相関

スピーキング・スコアに対する他の3技能（リーディング、リスニング、ライティング）のスコアに対する相関は、リスニング、リーディングについては低く（ $R^2<0.5$ ）、ライティングに対しては高かった（ $R^2>0.6$ ）。つまり、スピーキングは受容技能との相関が明確でなく、産出技能（ライティング）と相関することが示された。一方、スピーキングとリスニングはコミュニケーションの方向性に関して相補的な関係にある（参考文献（1）を参照）。つまり、聞き取れなければ、話せないことが予想される。スピーキング・セクションにおける高得点者（IELTS 6.5-9.0の3名）のリスニング・スコアは平均6.33（標準偏差は0.29）であった。スピーキング・セクションにおける低得点者（IELTS 4.5以下の20名）のリスニング・スコアは平均5.13（標準偏差は0.58）であった。このことより、スピーキング・スコアが高い受験者はリスニング・スコアが高い傾向にあることが窺える。

以上の結果より、超短期留学プログラム参加者の英語運用能力はリスニングとリーディングの受容技能にやや優れ、スピーキングとライティングの産出技能は留学に必要なレベル（スコア5.5以上）に達していないことがわかった。今回の試験結果ではこれら英語4技能のうち受容技能間及び産出技能間で正の相関が見られたが、これはIELTS以外の英語運用能力試験でも見られる特徴である。この点についてより正確な分析を進めるため、IELTSスコア（全スコアと各技能セクションのスコア、合わせて5つのデータセット）に対する主成分分析を行った。主成分分析とは、多くの変数により記述された量的データの変数間の相関を排除し、できるだけ少ない情報の損失で、少数個の無相関な合成変数に縮約して、分析を行う手法である⁽⁵⁾。図3に主成分分析の結果（第一主成分と第二主成分の散布図）を示す。横軸は第一主成分（PC1）、縦軸は第二主成分（PC2）である。第一主成分及び第二主成分の累積寄与率は82%であった。散布図に重ね合わせた4本の直線は各英語技能（変数）である。第一主成分はIELTSの全スコア（T）の影響を最も受けており、英語4技能のスコア（R、L、W、S）の寄与は第二主成分に影響している。今回の超短期留学プログラム参加者の第一主成分得点と第二主成分得点をPC1とPC2から成る座標空間にプロットしたものが図3である。参加者の英語運用能力はPC1軸に沿って概ね分布しており、更にPC2軸の方向への分布が見られる。PC2軸の正の部分は受容技能（リーディングとリスニング）の寄与が大きく、負の部分は産出技能（スピーキング及びライティング）の寄与が大きい。つまり、プログラム参加者は受容技能で評価されるグループと産出技能で評価されるグループに分けることがで

きる。この分析結果は先の相関係数による分析結果に一致し、プログラム参加者の留学前の英語運用能力の特徴を抽出することができたと結論付けられる。英語4技能の相関を図4にまとめた。

表5 今回の試験結果より得られた英語4技能のスコア間における相関係数

	Listening	Reading	Speaking	Writing
Listening		0.64	0.49	0.60
Reading	0.64		0.45	0.60
Speaking	0.49	0.45		0.63
Writing	0.60	0.60	0.63	

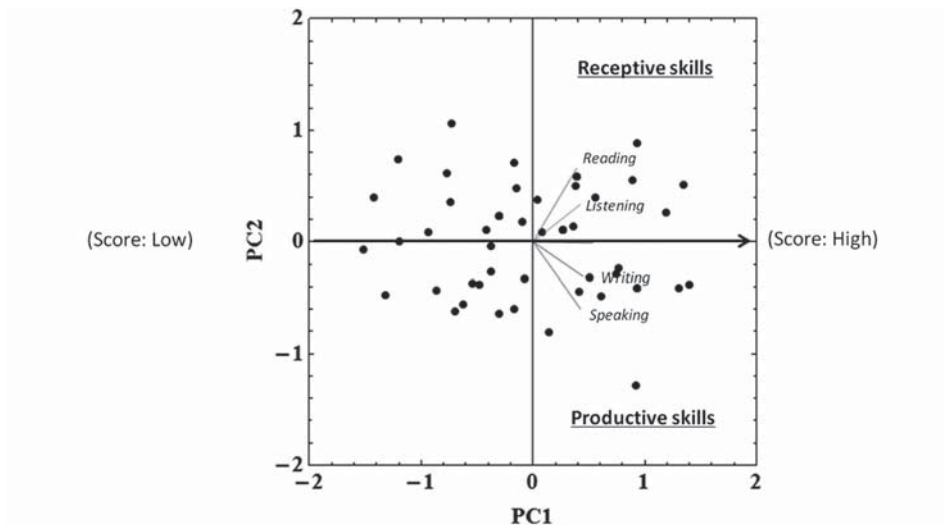


図3 IELTSスコアに対する主成分分析から得た第一主成分と第二主成分に関する散布図

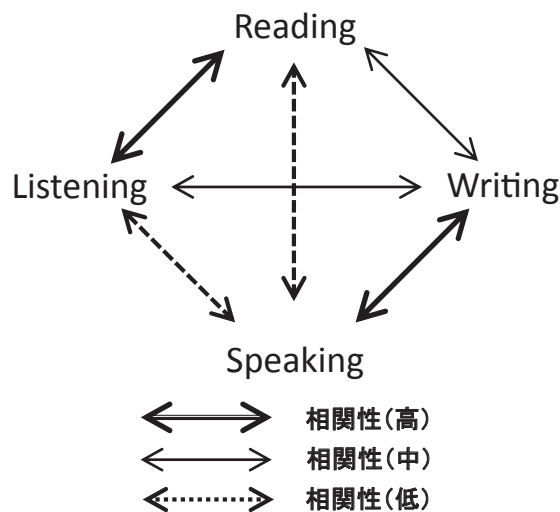


図4 英語4技能の相関関係を示したスキーム

3.4 スピーキング能力に対する準備講座と超短期留学プログラムの効果

今回のプログラムの特徴として、準備講座と超短期留学プログラムを通じて履修者（学生）の英語運用能力を測定する点が挙げられる。前節において紹介したように、超短期留学プログラムに参加する学生は原則として留学前に IELTS の受験が義務付けられ、留学前の英語4技能の評価が可能となった。一方、超短期留学プログラムにおいてはプログラムの実施先であるシドニー大学（「異文化」）とニューサウスウェールズ大学（「サイエンス」）の協力を得て、留学期間中のスピーキング・アセスメントを実施することができた。そこで、スピーキング能力について留学前の IELTS（平成23年12月）と超短期留学プログラム中のスピーキング・アセスメント（平成24年2月～3月）のスコア比較（IELTS スコアに換算）を行った。その結果を表6にまとめた。

表6 学内 IELTS、留学先でのスピーキング・アセスメント（IELTS スコアに換算）のスコアの推移（平均値）

文系プログラム

試験の種類	平均値	スコア変位の平均
Pre-departure IELTS	4.92	-0.62（出発前の IELTS と1回目のスピーキング評価を比較）
1st Speaking Assessment	4.20	0.43（1回目と2回目の評価を比較）
2nd Speaking Assessment	4.67	-0.28（出発前の IELTS と1回目のスピーキング評価を比較）

理系プログラム

試験の種類	平均値	スコア変位の平均
Pre-departure IELTS	4.86	0.61（出発前の IELTS と1回目のスピーキング評価を比較）
1st Speaking Assessment	5.38	0.47（1回目と2回目の評価を比較）
2nd Speaking Assessment	5.85	1.48（出発前の IELTS と1回目のスピーキング評価を比較）

留学期間中のプログラム開始日と終了時に行われたスピーキング・アセスメントの結果によると、スコアの平均値は0.4～0.5ポイント程度上昇した。仮に IELTS のスピーキング・スコアが5.0から5.5に0.5ポイント上昇したとすると、目安であるが TOEFL iBT のスコアでは63ポイントから72ポイント程度スコアが上昇したことに相当する⁽⁶⁾。このように、2週間から3週間という短い留学期間の間にスピーキングのスコアが有意に伸びることがわかった。留学前の IELTS のスピーキング・スコアとスピーキング・アセスメントのスコアとの比較については、理系プログラムではスコアの上昇（1.5ポイント）が見られたものの、文系プログラムでは逆にスコアの低下が見られた。文系プログラムについて個々の学生のスコアを検証したところ、IELTS のスコアと比較してスピーキング・アセスメントのスコアが低下した学生は全体の7割を占め、更にスコアが1～2ポイント低下していた学生は全体の2割にも上った。筆者が現地インストラクターへの聞き取りを行ったところ、スピーキング・アセスメント時の採点基準が IELTS におけるスピーキング・セクションの平均的な採点基準よりも厳しくなっていた状況が浮かび上がった。次回プログラムの実施までに、スピーキングのアセスメントのみならず他の英語技能についても評価基準の標準化を進める。

今回の調査より、短期間の留学においてもスピーキング・スコアの平均値が上昇する傾向にあることが示された。この結果は、留学がコミュニケーション・スキル（スピーキング技能を含む）の向上に有効な手段であることを示唆している。また、留学前に受験した ILETS のスピーキング・セクションのスコア（平均値）と留学先でプログラム初日に行ったスピーキング・アセスメントのスコア（平均値）との比較においてスコアの上昇が見られたことから、準備講座（全学共通科目 C 群外国語（英語））を履修していたこともスコアの上昇に寄与しているのではないかと考えられる。

4. 超短期派遣留学プログラムと準備講座の改善点について

本稿では、超短期派遣留学プログラムと一体化した新たな外国語科目（全学共通科目 C 群外国語（英語）「異文化」と「サイエンス」）の実施とこれに伴って行われた英語運用能力に関する評価の結果について報告した。本科目の履修者で超短期派遣留学プログラムに参加した学生 50 名の英語運用能力の特徴として、受容技能（リスニングとリーディング）で評価されるグループと産出技能（スピーキングとライティング）で評価されるグループで特徴づけられること、受容技能にやや優れているものの産出技能は留学に必要とされるレベルには到達していないことが明らかとなった。

一方、留学期間中に実施された二回のスピーキング・アセスメントの結果より、留学プログラムへの参加がスピーキング能力の向上に寄与することが示唆された。平成 23 年度実施の超短期派遣留学プログラムでは、スピーキング・アセスメントのみを行ったが、今後はライティングについても同様の評価を行うことで英語運用能力の変化を総合的に追跡できるようにしていきたいと考えている。

アカデミックライティングスキルの構築に関する Buckingham の調査報告によると、英語を母語としない学習者がライティングスキルを学ぶにあたりライティングの機会をできる限り多くすることに加え、リーディングを通じてライティングに必要な要素（文章のスタイル、文法、語彙など）を学ぶことも重要であると指摘している（参考文献（1）を参照）。今後、本短期プログラム及び準備講座においてもライティングスキルの向上を図るため、e-Learning 教材などを用いることでショートエッセイの作成に取り組む回数を増やす予定である。今後は更に、限られた講義時間の中で効果的に総合的なコミュニケーション能力を向上させるために何が必要なのかを明確にして留学準備講座を充実させていきたい。

注

- （1）平成 22 年度総長裁量経費採択事業：国際交流を通して英語運用能力の育成を高めるコースデザイン推進事業報告書
http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education/international/program/shortterm/documents/2010_report.pdf
- （2）超短期留学に関する意識調査、2011 年 4 月 21 日、交換留学説明会、於）京都大学
 この調査内容は、平成 22 年 9 月実施の全学教育シンポジウム（京都大学・宇治キャンパス）「京大の学士教育における国際交流・海外留学促進の取り組みの現状：国際交流を通じて英語運用能力の育成を高めるコースデザイン推進事業」西川美香子、森純一にて発表された。
- （3）平成 23 年度留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）採択校・採択プログラム一覧、

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）により、大学が実施する3カ月未満の留学生の受入れ、もしくは3カ月未満の学生派遣のプログラムに参加する学生を対象とした奨学金制度（通称：ショートステイ、ショートビジット）である。留学プログラムの参加者に対して日本学生支援機構（JASSO）より留学費用の一部として一人あたり80,000円が補助された。豪州短期プログラムは平成23年度に採択を受け、60名までが助成の対象となった。

http://www.jasso.go.jp/scholarship/documents/h23_sssv_saitakukou_saitaku_program_ichiran_.pdf

- (4) IELTS 白書 2011-2012, page 4. 公益財団法人日本英語検定協会
- (5) 秋川卓也『文系のためのSPSS 超入門』プレアデス出版（2007）
- (6) “Comparison of English Language Scores,” English Writing Center, The University of Sheffield, n. b. Web. 29 August 2012.

<http://www.sheffield.ac.uk/eltc/englishtests/toefl-ielts>

IELTS と TOEFL® は、運営団体や試験形態が異なることから公式な換算表は存在しない。あくまで目安として、海外の大学（具体的には京都大学の協定校でもある英国シェフィールド大学の例）を採用した。

参考文献

- (1) Buckingham, L. and Geri, N. (2008). Development of English academic writing competence by Turkish scholars, *International Journal of Doctoral Studies*, vol. 3, no. 8.
- (2) Keller, J. M. (1987). Development and use of the ARCS model of instructional design, *Journal of Instructional Development*, vol. 10, no. 3, pp. 2-10.
- (3) Powers, B. D. E. (2010). The Case for a Comprehensive, Four-Skills Assessment of English-Language Proficiency, *R&D Connections*, ETS, no. 14, pp.1-12.

謝辞

本実践報告の一部は公益財団法人・日本英語検定協会の受託研究費「国際交流におけるコミュニケーション・スキルの向上と英語を通じた批判的思考力の養成」により実施されたものである。

（京都大学国際交流推進機構国際企画連携部門・特定助教）

The Effectiveness of a Preparatory English Course and Study-Abroad Programs On Improving Students' Communicative Skills: Based on the Analysis of a Pre-departure IELTS

Mikako Nishikawa

Abstract

Two cases of study abroad, preparatory English course designs were compared to better understand the relationship to improvements in students' communicative skills. These cases were (1) "Inside Australia: Cross-cultural Communication" offered at The University of Sydney, and (2) "The Effective Science Communicator in a Global Society" offered at The University of New South Wales, Institutes of Languages. Both programs were tailored to cater the needs of Kyoto University students and aimed specifically at improving participants' communicative abilities. The pre-departure International English Language Testing System (IELTS) was conducted to identify participants' relative skill levels in four areas, (i.e. reading, listening, writing, and speaking) and determine which skill attention required particular attention. To evaluate speaking skills, an additional interview assessment equivalent to IELTS was conducted before and after the study-abroad program, in order to measure students' progress over the course of their study. Based on the analysis of these IELTS scores, there is strong evidence that students' receptive abilities have less impact on the performance of their productive communicative skills such as in writing and speaking. To increase overall scores, the students must therefore prioritize the improvement of their writing skills since it is strongly correlated to all other skills, but particularly speaking. This study indicates the preparatory course and the pre-departure IELTS was successful in helping students to become better communicators during their study-abroad program.

(G30 Assistant Professor, The Organization for the Promotion of the International Relations, Kyoto University)